

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720096

研究課題名(和文)近世初期の堂上における『万葉集』受容について

研究課題名(英文)About acceptance of "Manyoshu" among the members of the royal family salon in the early Edo period

研究代表者

大石 真由香(OOISHI, Mayuka)

関西大学・文学部・特別研究員PD

研究者番号：40624060

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『万葉集』の受容の様相について、本格的な『万葉集』研究の始まる近世初期に目を向け、この時代の『万葉集』の書写活動と注釈・研究活動のありようを検討するものである。

具体的には、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」書入の調査によって堂上における『万葉集』の書写活動の様相について検討する一方、北村季吟の『万葉拾穂抄』、およびその底本とされた惺窩校正本『万葉集』の著述態度を探ることにより、地下における『万葉集』の注釈・研究について検討してきた。

研究成果の概要(英文)：This work aims at investigating aspects of transcription, annotation and research activities of "Manyoshu" in the early Edo period when the real research of "Manyoshu" just started.

Especially, the reporter has been studying aspects of transcription activities of "Manyoshu" in the royal family salon based on exploring the memos which were jotted down on the pages of the old print version "Manyoshu" included in the collections of "Yomei Bunko" library. On the other hand, the reporter has investigated the aspects of activities of annotation and research of "Manyoshu", by means of exploring the intention of Kitamura Kigin through writing "Manyo Shusuisho" and that of Fujiwara Seika through calibrating a "Manyoshu" employed as the original text of "Manyo Shusuisho".

研究分野：上代文学

キーワード：万葉集 北村季吟 藤原惺窩 禁裏御本 陽明文庫

1. 研究開始当初の背景

『万葉集』研究は、すでにその研究史自体が研究対象たりうるものとなっている。にもかかわらず、研究の基礎となるはずの古写本・古注釈についての文献学的研究や、受容史・研究史といった『万葉集』の受容に関わる研究は近年まで顧みられることが少なかった。

しかし近年、近世文学分野では西田正宏『松永貞徳と門流の学芸の研究』(2006、汲古書院)に貞徳が晩年に志した『万葉集』研究について論じられ、上代文学分野でも『校本万葉集新增補』をきっかけに、田中大土の諸論文に広瀬本・春日本を中心とする非仙覚本系写本について、小川靖彦『万葉学史の研究』(2007、おうふう)に『万葉集』写本史と仙覚の『万葉集註釈』について考察されるなど、その受容史が注目されるようになってきた。

近世初期は本格的な『万葉集』研究の始まる時期である。この時代の『万葉集』受容の特徴は、北村季吟『万葉拾穂抄』の他、下河辺長流『万葉集管見』、契沖『万葉代匠記』など、現代の上代文学研究においても参考にしうる注釈の生まれたことである。特に契沖については夙に『契沖全集』(1973-76、岩波書店)が刊行されて資料が整っており、多くの研究書も世に出ている。また、『万葉集』研究史上初の全歌注釈書『万葉拾穂抄』を著した北村季吟の『万葉集』研究については、研究代表者のこれまでの研究によって徐々に明らかになりつつあった。

しかしながら、こういった近世初期における『万葉集』研究の発展は、『万葉集』受容の一側面でしかない。この時代、堂上歌人による中院本系諸本の書写、藤原惺窩による独自の『万葉集』改変など、中世歌学の継承の中でも『万葉集』の流布は確実に進んでいた。

この点を踏まえ、本研究では、近世初期の堂上を中心とした『万葉集』受容の様相を検討することとした。

2. 研究の目的

本研究は、これまで顧みられることの少なかった『万葉集』の受容の様相について、本格的な『万葉集』研究の始まる近世初期に目を向け、この時代の『万葉集』の書写活動と注釈・研究活動のありようを検討するものである。

この時代、地下歌人らによる『万葉集』の注釈・研究と、堂上歌人による『万葉集』の書写・利用がいずれも盛んに行われるようになる。この双方の動きが互いに影響しあって一時代の『万葉集』受容の様相を形作っていることを念頭に置き、堂上・地下双方の『万葉集』受容のありようを、特に堂上における『万葉集』の書写活動に中心をおいて、文献学的方法によって検討した。

3. 研究の方法

近世初期における『万葉集』受容の様相を明らかにするため、まず、堂上における『万葉集』の書写活動について把握する。また、藤原惺窩の『万葉集』改変を、堂上における『万葉集』の書写・利用と、地下における『万葉集』の注釈・研究活動とを繋ぐものとして捉え、惺窩の『万葉集』に対する態度を考察する。

具体的な研究の方法としては、大きく以下の三点について行った。

(1) 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の禁裏御本書入の全巻調査。

禁裏御本は原本も忠実な写本も現存せず、その姿は中院本系諸本の書入の中にわずかに見られるのみであると言われてきた。ところが研究代表者の調査により、陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の紫による書入が、禁裏御本から直接書写された可能性を持つ唯一の現存書物であることが判明した。そこで、「禁裏御本」の復元を目指し、当該本の紫による書入箇所を全巻調査し、中院本系諸本の代表たる京大本との相違点を確認した。

(2) 惺窩校正本『万葉集』の現存諸本の調査と、その成立過程、および改変箇所の改変意図についての検討。

近世初期の儒学者・藤原惺窩が独自に『万葉集』に改変を加えたとされる所謂「惺窩校正本」の完本は現在、前田家一本(尊経閣文庫所蔵)・八雲軒本(國學院大學所蔵)・白雲書庫本(東洋文庫所蔵)・天理図書館所蔵古活字書入本の四本が知られている。先行研究においては、書誌的共通性からこれらが惺窩校正本の系統に属するものであることの指摘と、当該諸本の仙覚本との相違が惺窩独自の改変によるものか、冷泉家伝本を踏襲したものかといった点に論の中心があり、諸本の相関関係について指摘する論は見られなかった。そこで、これら四本を精査し、惺窩校正本の成立過程を明らかにした。

また、惺窩校正本において、題詞の書き方や序の削除・改変のみならず歌本文にまで大幅な改変を行っているのは、巻五・八〇〇～八〇一、巻二十・四四六五～六七の二歌群のみである。これら歌本文の改変箇所を精査し、惺窩の改変意図と、改変された歌の解釈について検討した。

(3) 北村季吟『万葉拾穂抄』における、底本・惺窩校正本『万葉集』の本文採否状況についての検討。

北村季吟の著述による『万葉拾穂抄』の底本は、惺窩校正本である。私はこれまでに『万葉拾穂抄』に引用された先行の説(仙覚、定家等)に対する引用態度、採否状況から、『万葉拾穂抄』の著述態度を検討してきた。ここでさらに、底本である惺窩校正本をいかなる

基準で採否しているかを検討することにより、『万葉拾穂抄』の著述態度、及び近世初期における惺窩校正本『万葉集』の評価について検討した。

4. 研究成果

三年間の研究の成果は以下のとおりである。

(1) 陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の禁裏御本書入の全巻調査について。

当該本の紫による書入は、京大本に代表される中院本系諸本の代赭書入と同様に禁裏御本由来のものであり、現存しない禁裏御本原本から中院本を経ずに直接書き入れられた可能性を持つ唯一のものである。

当該研究の期間中、月に一度、陽明文庫に赴き、原本のすべてのページを確認して紫による書入を抜き出す作業を行い、平成25年度末までに巻四までの調査を終えた。また、院生アルバイトを雇用し、『校本万葉集』を用いて京大本の代赭書入及び諸本の訓の異同を調査した。調査途上ではあるものの、諸本の禁裏御本書入のデータベース化に向けて基本的な枠組みを構築できたと考えている。なお、平成26年度以降、この調査は特別研究員奨励費によって継続している。

(2) 岩瀬文庫本『万葉拾穂抄』巻四の翻刻・公表。

西尾市岩瀬文庫には北村季吟自筆と目される『万葉拾穂抄』巻一・巻四が所蔵される。当該本は、江戸期に流布した刊本『万葉拾穂抄』とは異なった注釈内容が見られ、刊本のための浄書以前の季吟の説が知られる。巻一は2009年3月に『叙説』36号に翻刻・公表したが、巻四は未だ世に出ていなかった。そこで、岩瀬文庫本『万葉拾穂抄』巻四を翻刻・公表した。これによって、現存が確認されている『万葉拾穂抄』の自筆本がすべて翻刻されたことになる。

(3) 北村季吟『万葉拾穂抄』における、底本・惺窩校正本『万葉集』の本文採否状況について。

まず、惺窩校正本『万葉集』の一本である白雲書庫本を現地調査し、すでに手元にある天理図書館所蔵古活字書入本の影印と照らし合わせ、惺窩校正本本文の異同を確認した。その上で、底本であるこの本を、北村季吟が如何なる基準によって採否したのかを考察した。

季吟は首尾の整った正統な伝本として惺窩校正本を尊重するが、和歌のことばとして不適切な部分は流布本によって改めている。季吟の本文校訂は、首尾が整い、和歌として完成度の高い『万葉集』を作り上げることを目的としていたことが明らかになった。

(4) 惺窩校正本『万葉集』の現存諸本の成立過程について。

惺窩校正本諸本のうち、前田家一本・八雲軒本・白雲書庫本の写本三本の比較から、惺窩校正本の成立過程を明らかにした。

惺窩は当初から『万葉集』全体の改変を目論んでいたのではなく、巻五・八〇〇～八〇一、巻二十・四四六五～六七の二歌群を『万葉集』から見出して儒学者としての立場に沿ったものへと改変し、それを踏襲する形で『万葉集』全体の改変に取りかかったと考えられる。前田家一本が他の惺窩校正本に比べ仙覚本の形を留めていることから、写本三本の中で最も古い形であると推測される。さらに、前田家一本成立後も仏典関係箇所を削除するなど改変を続け、その各段階に弟子たちの求めに応じて貸し出し、八雲軒本・白雲書庫本・天理図書館所蔵古活字書入本が成立したと考えられる。また、これら諸本は一つの原本を元にした兄弟関係ではなく、原本自体が複数回の改変を経て見られる。現存諸本は原本の度々の改変の痕跡をそれぞれに留めたものであり、また、ここから惺窩が儒学者としての立場を確立してゆく過程をも窺うことができる。

(5) 惺窩校正本『万葉集』巻五・八〇〇歌「反感歌」の解釈について。

(4)に関わって、惺窩校正本において題詞や序のみならず歌本文にまで大幅な改変が行われている巻五・八〇〇歌について、仙覚本との比較検討を行い、惺窩校正本における当該歌の一首解釈を試みた。その結果、惺窩はこの歌を自らの儒学者としての所信を表明するものとして「人倫」を前面に出し、より具体的に、より教訓的に作り替えたものであることが明らかになった。

(6) 『万葉集』巻十七・三九三二歌第二句「海邊都祢佐良受」の訓について。

これまでに『万葉集』の現存諸本を調査していく中で、巻十七・三九三二歌第二句「海邊都祢佐良受」について、仙覚以来定訓とされていた「ウミヘツネサラズ」に問題があることが分かった。そして、次点本である元暦校本の訓「ハマツネサラズ」に立ち返るべき可能性について指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

大石 真由香、『万葉集』巻十七・三九三二歌「海邊都祢佐良受」試論、国文学(関西大学国文学会) 査読有、99号、2015、pp.1-14

大石 真由香、岩瀬文庫本『万葉拾穂抄』
解題と翻刻(下)、叙説、査読有、41号、
2014、pp.85-147

大石 真由香、『万葉拾穂抄』と惺窩校正
本『万葉集』、叙説、査読有、40号、2013、
pp.193-207

〔学会発表〕(計2件)

大石 真由香、惺窩校正本『万葉集』の
成立 前田家一本・八雲軒本・白雲書庫
本の比較から、和歌文学会関西例会、
2015/4/18、大手前大学(兵庫県西宮市)

大石 真由香、惺窩校正本「反感歌」に
ついて、萬葉語学文学研究会、2015/3/28、
関西大学(大阪府吹田市)

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大石 真由香(OOISHI, Mayuka)
関西大学・文学部・特別研究員(PD)
研究者番号: 40624060